

L1 韓国語話者の L2 日本語習得に見られる中間言語音声体系の特徴

金 菊熙

It has been suggested that effective speech learning is possible only until a critical period that ends near the beginning of adolescence and very few individuals who start to learn a second language in adulthood manage to speak it without a detectable foreign accent. Foreign-accented speech is understood by Munro(1998) as non-pathological speech that differs in some noticeable respects from native speakers' pronunciation norms.

This article has reviewed the result and questions which were found by the previous study of Kim(1999). It was originally intended to assess the general relation between adult Korean subjects' total years of learning Japanese and the overall degree of a perceived foreign accent in their production of Japanese sentences. It also aimed at investigating how native and non-native speakers differ in their perception of foreign accents of other Korean speakers' L2 Japanese. The experimental group consisted of adult Korean-born learners who began to learn Japanese as a second language after their puberty.

キーワード：外国人訛り (foreign accent), 臨界期, 中間言語, 化石化, 母語転移

1. はじめに

L2 の習得において子供のほうが大人の学習者より有利であるという見解は SLA の研究分野では広く信じられていることである。このような言語習得における理想の学習可能年齢が存在するという主張 (Penfield & Roberts 1959) は Lenneberg (1967) の臨界期仮説 (Critical Period Hypothesis) によって定立されるようになってきた。臨界期仮説では思春期以降に第 2 言語 (L2) 学習を始める学習者の場合、目標言語 (TL) の母語話者のような自然な L2 音声の習得は不可能であり、常に外国人訛り (foreign accent) が観察されうるとしている (cf. Scovel 1969; 1988)。しかし Krashen (1973) は Lenneberg の研究データを再検討し、脳の側部化が思春期の直前に起こるという主張を裏付けるような論拠はないと反論し、ただ一元的な理解のもとで言語習得における '臨界期' が存在するとの主張はとても疑わしいものであると述べている (B. Schmid 1986)。Krashen の主張どおり成人 L2 学習者の習得能力にかかわるものが神経病理学的な要因 (neurological factors) だけであるとの見解は現在の SLA 研究分野では殆ど信用されなくなってきたようである。

また Selinker (1972) の中間言語理論 (Interlanguage Theory) によると L2 学習者は目標言語の習得過程で一連の中間言語体系を形成するという。それは学習者の母語 (L1) でもなく目標言語 (L2) でもない独特な規則を持つもので、ときにある言語規則は「化石化

(fossilize)」してしまうという。Selinker は学習が始まってから最初の数年間に完全に化石化するわけではないとしているが、現状では化石化が始まる時期や原因、さらにそのメカニズムなどについて十分な説明がされているとは言えない。ただこれまでの研究結果として暫定的な1つの結論はL2 音声の習得は文法の習得とは多少違うプロセスをなすということである。Flege(1980)は‘中間言語体系’として認められるようなL1 とL2 と異なる相対的に安定した音声的体系(interlanguage phonetic system)が存在するという。つまり、L2 のサウンドシステムに対する音声調整機能は学習者のL1 からL2 へという単純な干渉(interference)によるものではなく、中間言語体系の特徴として理解する方がより妥当であるという。

これらの先行研究の見解を踏まえてKim(1999)は成人L2 学習者の音声習得の諸様相の中から外国人訛りの特質に焦点を当て、L2 学習年数によって外国人訛りの程度には何らかの変化が見られるという仮説を立て、次のような2つの実験を行った。「実験1」では成人L2 学習者をL2 習得年数によって4つのグループに分け、各グループの外国人訛りの程度には有意差が見られるかどうかを調べてみた。「実験2」ではL2 学習者の外国人訛りの本質そのものをよりはっきりさせるべく、目標言語の母語話者と上級学習者を被験者に、異なるL2 習得年数を持つ学習者の発話を聞かせた後、どの部分で外国人訛りを知覚(perceive)したかを述べてもらい、さらにL2 の母語話者と上級学習者の判断内容を比較してみた。続くKim(2001)では成人L2 学習者の中間言語音声習得における母語の影響をより詳しく調べるため、大人になってからL2 学習を始めた同一の母語を持つ上級学習者を出身地の方言別にグループ分けし、外国人訛りの程度に有意差が見られるかどうかを調べた。

本論文は上記のKim(1999, 2001)の研究内容を検証するためのものである。具体的にはこれらの実験で明らかになったいくつかの疑問点の中から特に一連の実験に用いられた実験文の妥当性を再考察したいと思う。

2. 先行研究の考察

ここではまず外国人訛りの定義付けをした後、この論文の検証対象となるKim(1999)とKim(2001)の研究内容を詳しく述べることにする。

2-1. 外国人訛りの定義付け

L2 学習者の発話に関する研究では非母語話者の発話がいくつかの異なる次元で評価されているが、その理由としてL2 学習者の発話を評価する際に用いられる方法論の違いや解釈での非一貫性などの問題が考えられる(Munro & Derwing 1995b)。外国人訛りの定義についても研究者によって若干異なる場合があるが、Munro(1998)は、「外国人訛りは第2言語学習者によって生じられる非病理学的な発話(non-pathological speech)で、目標言語

の母語話者の発話特徴と体系的な面で部分的に異なるもの」であるとしている。

外国人訛りを論じる際、次の 3 つの概念 — intelligibility, comprehensibility, & accentedness — がよく用いられる。まず *Intelligibility* について Nelson(1982)は、「話し手によって意図された通りのメッセージの理解」としており、Munro & Derwing (1995a, 1995b)では、「話し手(L2 学習者)の内容を聞き手(母語話者)が実際に理解できる範囲」としている。しかしこの場合「理解の範囲」を評価する普遍的方法はないことも指摘している。*Comprehensibility* は特定の発話を理解する上で聞き手が感じる困難の程度をいい、*Accentedness* は話し手の外国人訛りがどの程度の強さで認知されるかを意味するものとして定義されている(Munro & Derwing 1997)。この 3 つの評価基準は相互に関連しているが、その一方で部分的には独立したものでもある。普通強い訛りのある L2 の発話は訛りのないものに比べ intelligibility や comprehensibility の評価値も低くなる傾向にあるが、必ずしもそうではないという見解もある。

一般に聞き手の多くは訛りに対する評価基準としてイントネーションの良さの程度やエラーの諸要因を考慮していたが、その中でも音声上のエラーは comprehensibility の評価においてはあまり大きくかわらない要素であり、さらに intelligibility の評価では全く関係しない要素であることを観察した(Munro & Derwing, 1995b)。これらの観察結果から Munro & Derwing(1997)は訛りの程度と実際の L2 発話での可解力(intelligibility)の程度は部分的にしか関連していないと結論付け、訛りと可解力との関連性の程度もそれぞれの聞き手によって異なるものであると主張している。

2 - 2 . Kim(1999)の研究

2 - 2 - 1 . 実験の背景

外国人訛りの研究において最も関心が寄せられているのは L2 学習期間と外国人訛りの程度変化に関するものである。具体的には、L2 学習期間に伴って外国人訛りはどのように変わっていくのか、可解性(intelligibility)と音声分節単位(phonetic segments)の正確度は学習が進むにつれどのように変わるのか、さらに と の間にはどのような関係が現れるのかを中心に調べられている。例えば、思春期以降に L2 英語の学習を始めたスペイン語母語話者を対象にした Flege & Fletcher(1992)の横断的研究では米国に平均 0.7 年間居住する学習者グループと平均 14.3 年間居住しているグループの間では後者に比べて前者はかなり強い外国人訛りがあることが報告された。しかしこれより先に行われた Flege(1988)の横断的研究では米国に平均 1.1 年と 5.1 年間居住している L1 中国語話者グループの間では L2 英語習得における外国語訛りの程度には有意差が見られなかった。

ここで Kim(1999)は上記 を調べるため、韓国語を母語とする成人 L2 日本語学習者を対象に「実験」を行った。まず仮説として L2 学習年数によって外国人訛りの程度には何らかの変化が見られ、特に上級の L2 学習者と初級の L2 学習者の間では統計的にも有意差

が見られるだろうと予測した。韓国人被験者の選定においては主に韓国での日本語学習年数と来日後の日本語学習年数を考慮して4つのグループに分けた。さらに比較集団としてL2の母語話者グループを設けた。

- Group A: 在日年数 6 ヶ月～1 年未満
- Group B: 在日年数 1 年以上～2 年未満
- Group C: 在日年数 2 年以上～4 年未満
- Group D: 在日年数 4 年以上
- Group E: 日本語の母語話者

各グループは10人ずつで韓国人被験者40人中、女性20人と男性20人となっている。被験者の年齢は全員が20代～30代で、在日年数が短いGroup Aの場合は10人中9人が20代であるがGroup Dは20代が4人と30代が6人である。日本語学習開始年齢は20-25歳(18人) > 26-40歳(14人) > 15歳-19歳(8人)の順であるが、殆どの人は20歳を過ぎてから日本語の学習を始めている。日本にくるまでの韓国での日本語学習時間については週2-3時間の学習時間で換算した場合、全くないと答えた人が13人、1年未満が11人、2年未満が9人、4年未満が3人、そして4年以上と答えた人が4人いた。

学習者の出身地別分類では、ソウルの出身者が全体の3分の2程度でプサンやテグ等の慶尚道の出身者が7人、また全羅道や済州道の韓国南部地方の出身者も1人ずつ含まれている。しかし彼らの第1言語は必ずしも出身地の方言に限らず、中にはソウルに長く居住していたため出身地の方言と共通語を両方駆使する被験者も少なくはない。被験者の殆どは来日後日本語学校で日本語教育を受けているか受けた経験を持っており、40人の被験者の内グループAを除くほぼ全員が日本語能力試験の1級に合格している。

実験に用いる例文はグループAの被験者レベルに合わせて日本語学校などで広く使われている会話のテキスト(スリーエーネットワーク発行、「新日本語の基礎」)の中から50の短文を選択した。その後ある1人の上級学習者に50文を繰り返し読んでもらい、同時にある音声学者による訛りの判定を行った。判定の結果L2学習者の朗読文の中から日本語の母語話者にはない外国人訛りの特徴を強く持つものとして次の5つの文章を選択した。

タクシーにカメラを^{わす}忘れてしまいました。
旅行に行く^{りょこう}前に、^い切符^{きっぷ}を^か買って^かおきます。
いっしょに^{しやしん}写真を^と撮ろう。
あしたは^{たぶん}多分^{てんき}いい天気でしょう。
このビルは^{きょねん}去年^た建て^たられましたか。

各文章にはイントネーションパターンの違いと共に特に韓国語の母語話者にとって難しいと思われるL2発音の難点が含まれている。文1での「タクシー」の長音や文2の「切符」の「っ」音、文3、4での「ん」の発音がその例である。

韓国語話者の L2 日本語の朗読に現れる外国人訛りの判断は 10 人の日本語の母語話者に行ってもらった。各評価者は音声学の知識を持たないこの分野の‘未経験者’であるが、これに関連する多くの先行研究では経験のない評価者間の判断値の信頼度は高いとしている (cf. Munro & Derwing 1995)。評価者の訛りの判断基準には共通語が使われている。また被験者の母語との親密関係 (familiarity) が外国人訛りの判断に影響を与えうる点を考慮して韓国語の学習経験や韓国語話者との深い交流のある者は含まないことにした。

外国人訛りの評価には 5-point scale を応用した 7-point scale を用い、「かなり訛りがある」から「訛りはない」までの選択項目にチェックを入れるよう指示した。また本テストに入る前に簡単な予備テストを行い、経験のない評価者が外国人訛りを判断するにあたって、ある程度の基準が得られるようにした。本テストでの評価が始まると、25 分間テープが止まることはなく、各文は 1 回だけの再生となる。つまり評価者は 1 文を聞いてから次の文が再生されるまでの 5 秒間に訛りの程度を判断することになる。

「実験 1」では母語話者による外国人訛りの判断の際その基準となる言語能力—外国人訛りの判定基準—が上級学習者と異なるかどうかを調べた。実験 1 の被験者データや実験文は実験 2 のものを用いているが、評価者の方は日本語の母語話者と韓国人の上級 L2 日本語学習者で構成されている。まず被験者は韓国語話者 20 人と比較集団としての日本語の母語話者 5 人である。被験者の性別は各グループで男性 2 人と女性 3 人で、全体の比率は男女 3 : 2 の割合になっている。評価者は上級 L2 学習者である韓国語話者と日本語の母語話者 5 人ずつである。

実験 2 では Semantic Differential Technique を応用した 7-point scale の評価シートを考案した。録音データに対し 5 つの項目にわたってそれぞれの判定値を選択するよう指示した(「図 1」参照)。なお、各チェック項目の違いを理解してもらうために項目別に説明を行った後さらに予備テストを実施した。一度評価シートを用いた各項目の判定が終わると一定の休憩時間を設けた。その後再び同じ録音データを再生して評価者が判断の際に用いたと思われる評価基準を口頭で説明してもらい、口述内容はすべて録音に収めた。評価者から得られたこの録音データ(以下 Scripts と呼ぶ)は日本語話者と韓国語話者でまとめ、両言語話者間の判断内容を比較する際の分析資料として用いることにした。

「図 1」 実験 2 の評価シートの例

早い	-----	-----	-----	-----	-----	-----	遅い
聞きやすい (単音)	-----	-----	-----	-----	-----	-----	聞きにくい
自然な	-----	-----	-----	-----	-----	-----	不自然な
分かり易い (文章)	-----	-----	-----	-----	-----	-----	分かり難い
訛っていない	-----	-----	-----	-----	-----	-----	訛っている

2-2-2. 「実験」の結果

L2 の学習年数と外国人訛りの程度との関係を調べた「実験」では各グループ間の外国人訛りの評価平均値の有意差を調べるため、統計式 ANOVA を用いた。その結果韓国語話者の被験者の間では実験文 4 でのみグループ A とグループ D の間で有意差が見られた(下表 1 を参照)。

表 1. 実験文 の統計結果

分散分析表						
	Df	MS	Df	MS	F	p-値
	効果	効果	誤差	誤差		
1	4	30.78822	44	0.319763	96.28462219	3.59512E-21
F値の検定、変数 S4 有意確率 主効果 : GROUP						
グループ	GROUP A	GROUP B	GROUP C	GROUP D	GROUP E	
平均値	2.260000	2.650000	3.010000	3.177778	6.620000	
1 G-A		0.668399	0.084659	0.024132	5.40814E-19	
2 G-B	0.668399		0.731054	0.401676	1.82909E-17	
3 G-C	0.084659	0.731054		0.980435	5.85423E-16	
4 G-D	0.024132	0.401676	0.980435		8.17714E-15	
5 G-E	5.41E-19	1.83E-17	5.85E-16	8.18E-15		

2-2-3. L2 の母語話者と学習者間外国人訛りの知覚

「実験」では在日年数の長い韓国語話者の上級日本語学習者が他の韓国語話者の L2 日本語における外国人訛りをどのように評価しているのかを調べた。さらに外国人訛りの評価の際に用いられる判断の基準は何であり、またそれは日本語の母語話者とどのように異なっているのかを調査した。ここでは両言語話者の判断がどのような相関関係を示しているのかを調べるため、t 検定を用いている。その統計結果は次の「表 2」のようである。

表 2. 両言語話者間評価結果

従属 2 標本の t 検定		有意確率(強調表示) p < .05000						
	平均	標準偏差	N	差	標準偏差	T	Df	P
SPEED (Japanese)	3.828	0.833427						
SPEED (Korean)	4.216	0.993177	25	-0.388	0.627375	3.09225	24	0.004979
KIKITORIYASUSA (Ja.)	3.32	1.201388						
KIKITORIYASUSA (Ko.)	2.528	0.79137	25	0.792	0.878408	4.508157	24	0.000145
SIZENSA (Japanese)	3.784	1.364942						
SIZENSA (Korean)	3.968	1.374385	25	-0.184	0.890543	-1.03308	24	0.311866
WAKARIYASUSA (Ja.)	3.304	1.220819						
WAKARIYASUSA (Ko.)	2.512	0.668531	25	0.792	0.899037	4.404715	24	0.000189
NAMARI (Japanese)	4.216	1.4988						
NAMARI (Korean)	4.288	1.459543	25	-0.072	0.979592	-0.3675	24	0.716467

t検定での両言語話者間の評価結果は「話す速度」、「聞き取りやすさ」、「分かりやすさ」の3つの項目で有意差が見られた。有意差が見られなかったのは「自然さ」と「訛りの程度」の2項目で、判断結果は近いものと考えられる。つまり被験者の日本語朗読文に対する外国人訛りの程度判断は、韓国語話者と日本語話者の評価者間で異なるものではないということである。

次に韓国語話者と日本語話者の評価内容をそれぞれの判断項目間の相関関係で表しているのが「表3」と「表4」である。「表3」の日本語話者の評価者の場合、「話す速度」の判定値は「自然さ」の判定値と弱い相関を持つ。しかし「聞き取りやすさ」、「分かりやすさ」、そして「訛りの程度」の判定結果とは何の相関も持たないと解釈できる。それに比べて「聞き取りやすさ」、「自然さ」、「分かりやすさ」、「訛りの程度」の判断結果は相互に強い相関を示している。例えば、「聞き取りやすい」と判定された朗読文は“自然で、分かりやすく、訛っていない”との判定結果に強く結びつくのである。これに比べて「表4」の韓国語話者の評価は日本語話者との場合とは違って、「話す速度」の判断結果が「聞き取りやすさ」を除く残り3つの判断項目と中程度の相関を示していることが指摘できる。つまり被験者の朗読スピードは韓国語話者評価者の「自然さ」、「分かりやすさ」、そして「訛りの程度」の判断結果と何らかの形で結びついていることが言える。

この結果から両言語話者の判断項目別相関関係は類似していると言えるが、韓国語話者の評価者の場合「話す速度」が「自然さ」、「分かりやすさ」そして「訛りの程度」と中程度の相関関係を持つことが日本語話者との違いとして指摘できるのである。

表3．日本語話者の評価結果

相関係数	有意確率(強調表示) $p < .05000$				
	SPEED	KIKITORI	SIZENSA	WAKARI	NAMARI
SPEED	1	-0.08339	0.024584	-0.06277	-0.0851
KIKITORIYASUSA	-0.0834	1	0.938311	0.9456746	0.918933
SIZENSA	0.02458	0.938311	1	0.9452209	0.965535
WAKARIYASUSA	-0.0628	0.945675	0.945221	1	0.931778
NAMARI	-0.0851	0.918933	0.965535	0.931778	1

表4．韓国語話者の評価結果

相関係数	有意確率(強調表示) $p < .05000$				
	SPEED	KIKITORI	SIZENSA	WAKARI	NAMARI
SPEED	1	0.198735	0.446054	0.4264254	0.362311
KIKITORIYASUSA	0.19874	1	0.776232	0.7908437	0.757492
SIZENSA	0.44605	0.776232	1	0.7731669	0.972728
WAKARIYASUSA	0.42643	0.790844	0.773167	1	0.773491
NAMARI	0.36231	0.757492	0.972728	0.7734908	1

次の Scripts 分析では「実験」で得られた評価者 10 人(日本語話者 5 人、韓国語話者 5 人)の口述評価データを訛りの判断要因別に要点を絞ってまとめた。判断の要因別分類では被験者の誤った発音(長音や促音の間違い、不必要な音の添加、発音の短縮など)やポーズの取り方(区切りがない、もしくは区切らない所でポーズを入れる)、日本語にはないイントネーション(単語の頭に強勢を入れる、助詞のイントネーションパターン等)については両言語話者の評価内容は重複していることが多い。しかし単語の高低(例えば「いい天気」の高低の区別)や単音での日本語と韓国語の発音の違い(例えば、「外国人がしゃべるような感じ」「日本語にはない音」との指摘など)、音節間の拍の捉え方やリズムに関する判断(「流れるような話し方」「単語 1 個 1 個を正確に発音していない」などの例)は韓国語話者の評価者には多く欠如している部分でもあった。さらに韓国語話者の訛りの判断では発話の滑らかさが重要なポイントとなっていて少し早口であったり途切れのない明瞭な朗読文に対しては「日本語の母語話者で訛りはない」と判断する傾向があった。このことから上級学習者の判断は日本語の音律構造に対する知識(又は経験)に大きく基づいており、母語話者の判断基準と異なっていると言える(表 5)。

表 5 . Script 分析結果の一例(実験文)

J1: 「いい天気」から速くなる、リズムが変、「多分」と「いい天気」の間にまがない、ポーズがない
J2: 「いい天気」が変、「でしょ」で終わってる感じ
J3: 「いい天気」のあいだに間がない、イントネーションが変、「いい」のストレスの問題
J4: 「いい」のイントネーションが違う
J5: 「いい天気」のイントネーション、「多分」の「ぶん」が強い感じ
K1: スピードが速い、訛りはない、自然、日本人だと思う
K2: スピードが速くて聞き取りにくい部分があるけど訛りはない、日本人だと思う
K3: 「いい」と「天気」の高低が違う
K4: 自然、日本人
K5: 「多分」と「いい」の第一音節に来るアクセントがない

*被験者は Group A の 20 代ソウル出身男性、J : 日本人評価者、K : 韓国人評価者

2 - 3 . Kim(2001)の研究

続いての Kim(2001)では韓国語母語話者の出身地別方言の特質(アクセント型)が L2 日本語の音声習得に何らかの影響を与えているかどうかを外国人訛りの程度判断で調べた。被験者は韓国ソウル出身方言話者と慶尚道出身の方言話者(ピッチアクセント)各 5 人と比較集団として日本語の母語話者 5 人を対象にした。被験者は全員女性で、韓国語話者の場合実験同時全員が日本の大学院に在籍していた。実験文は Kim(1999)の研究で選定したものの中から次の 5 つの文章を使用した。

荷物にもつも多いし、雨あめも降ふっているし、タクシーで帰かえります。
 今いま私わたしがやったとおりに、エンジンくを組み立たてて下ください。
 私わたしは娘むすめの誕生たんじょうび日にプレゼントおくを送おくってやりました。
 地震じしんが起おきた場ばい合あいは、すぐ火ひを消けしてください。
 薬くすりを飲のんだのに、まだ熱ねつが下さがりません。

日本語の共通語話者からなる5人の評価者には被験者の言語背景について一切説明せずに被験者の録音データを聞かせた後日本語の母語話者が否かを判断させた。さらに訛りに程度を3つの尺度の中から選択するよう指示した。

「t検定」による統計処理の結果、次の「表6」のように文章とでソウル方言話者と慶尚道方言話者の訛りの程度には有意差が見られた。

表6. 対応サンプルの検定

	自由度	有意確立(両側)
Sentence1(Seoul-Kyungsangdo)	4	<u>.028</u>
Sentence2(Seoul-Kyungsangdo)	4	.242
Sentence3(Seoul-Kyungsangdo)	4	.110
Sentence4(Seoul-Kyungsangdo)	4	<u>.019</u>
Sentence5(Seoul-Kyungsangdo)	4	.226

3. 実験

3-1. 背景

L2の学習を始めてから間もない学習者の場合L2発話において母語の様々な影響が観察されうるが流暢に話せる段階になると学習初期に比べかなり目標言語に近づいていくこともよく観察される。その一方で学習年数が長い上級学習者の場合でもL1の影響が特定のイメージとして定着しL2の発話の際は外国人訛りとして目標言語とは違う印象を与える例も一般的である。韓国語を母語とするL2日本語学習者の場合も発話の中で目標言語とは違う特徴が多く観察される。しかし現行のL2日本語教育を始めとする諸外国語教育ではこの部分についてあまり注意が払われていないため、実際目標言語の母語話者との会話の中でL2話者の母語(韓国語)の影響がどのように評価され、どの部分で一番外国人訛りを感じさせるかなどについて、殆ど学習者へのフィードバックは行われていないのである。

Kim(1999, 2001)は思春期以降L2日本語学習を始めた成人韓国語話者の中間言語音声体系を‘外国人訛り’を中心に調べたが、それぞれの実験結果は実験文によって違う意味をもたらしている。その原因の1つとして考えられるのは実験文の選定基準の問題である。Kimの先行研究ではいずれも上級学習者の発話を基準に外国人訛りが強く感じられる文章を用いているが、このことが逆にL2習得年数と外国人訛りの程度変化の関係を現れ難くして

いた原因であるとも考えられる。なお、外国人訛りという印象をもたらす要因として分節的要素の他に超分節的要素(例えばアクセント型)が考えられるため、韓国語と日本語の音律面での対象比較分析だけでは外国人訛りの要因を十分に説明できないという問題がある。

このことから本研究論文では Kim(1999, 2001)の研究で使われた実験文をもう一度検証することにした。一般に韓国語話者の L2 日本語習得において外国人訛りが現れやすい文とそうでない文に分類できるとしたら、訛りの要因を理解するさらなるステップへつながることと思う。

3 - 2 . 実験の手順

3 - 2 - 1 . 実験文

Kim(1999, 2001)の先行研究で用いられたものと同じく初級～中級学習者向けの参考書から選んだ以下の 50 の文章を使用する。実験では漢字の読み間違いなどを防ぐためにすべてふりがなを付けている。

1. かぜをひいたんです。
2. 道がわからないんですが、教えてくださいませんか。
3. 音楽を聞きながらコーヒーを飲みます。
4. 荷物も多いし、雨も降っているし、タクシーで帰ります。
5. 電気がついています。
6. この椅子は壊れています。
7. タクシーにカメラを忘れてしまいました。
8. 壁に絵が掛けてあります。
9. 旅行に行く前に、切符を買っておきます。
10. いっしょに写真を撮ろう。
11. あした大阪城へ行こうと思っています。
12. 来年結婚するつもりです。
13. すぐ病院へ行った方がいいです。
14. あしたは多分いい天気でしょう。
15. 午後から雪が降るかもしれません。
16. 規則を守れ。
17. スイッチに触れるな。
18. 今私がやったとおりに、エンジンを組み立てて下さい。
19. 仕事が終わった後で、会社の人と食事に行きます。
20. この説明書を読めば、使い方が分かります。
21. 値段が安ければ、買います。
22. カメラなら新宿が安いです。

23. 時間じかんに遅おくれないようにして下ください。
24. 私わたしは課長かちょうにしかれました。
25. 私わたしは弟おとうとにカメラこわを壊こわされました。
26. このビルきよねんは去年た建たてられました。
27. みんなで食しょくじ事じするのたのは楽たのしいです。
28. 私わたしは本ほんを讀よむのすが好すきです。
29. レポートなまえに名か前わすを書かくのを忘わすれました。
30. 手紙てがみを讀よんで、安あんしん心しんしました。
31. 用事ようじがあるのはやで、早かえく帰かえります。
32. 会議かいぎは何時なんじに終おわるか、分わかりません。
33. パーティーこに來こられるかどうしか、知しらせてください。
34. 私わたしは田中たなかさんじしよに辞書じしょをいただきました。
35. 私わたしは鈴木すずき先生せんせいに英えいご語ごを教おしえていただきました。
36. 奥おくさんわたしは私わたしに印りょうり度つく料理りょうりをつくくださいました。
37. 私わたしは娘むすめに誕たんじょうび生じょうび日びの普おくレゼントくをおくくださいました。
38. 家うちをか買かうために、お金かねをためています。
39. このドライバちいーは小ちいさいねじしを締しめるのつかにつかいます。
40. 今いまにも雨あめが降ふりそうです。
41. ちよっとタバコかをか買かってきます。
42. ゆうべお酒さけを飲のみずぎました。
43. この辞書じしょは字じがおおおくて、見みやすいです。
44. 部へ屋やをかいれいにします。
45. 地じ震しんが起おきた場ば合あいは、すぐ火ひを消けしてください。
46. 薬くすりを飲のんだのに、まだ熱ねつが下さがりません。
47. 私わたしは英えいご語ごが少すこし話はなせます。
48. ちようど今いまから映えい画ががはじまるところです。
49. 部ぶ長ちようは加か藤とうさんおをおさかをしゆっちようへ大お阪さかへ出し張ちようさせました。
50. お客きやく様さまはロろビびーにいらっしゃいます。

3 - 2 - 2 . 被験者の選定

Kim(2001)の研究では韓国人 L2 日本語学習者の出身地域別方言によって日本語発話における外国人訛りの程度に一部の実験文で有意差が見られた。また有意差が見られなかった他の実験文においてもいずれの文で慶尚道出身方言話者の方がソウル方言話者に比べ訛りが少ないという結果が得られた。韓国の慶尚道方言には日本語の共通語と類似したピッチアクセントが存在し、これが韓国人 L2 日本語学習者間の訛りの程度の差につながった

と考えられる。このことから今回の実験では出身地域別方言の違いによる訛りの差異を避けるため、韓国人被験者は慶尚道出身者以外の人に限定した。韓国人被験者は全 10 人で、男女それぞれ 5 人ずつである。被験者は全員思春期以降 L2 日本語学習を始めており、韓国の大学に在学中または卒業後来日している。来日期間は 1 年未満が 3 人、1 年以上～5 年未満が 3 人、5 年以上が 3 人となっているが、韓国での学習期間を考慮するといずれの被験者も日常生活には殆ど支障のない L2 運用力を持っている。被験者の年齢、韓国での L2 学習期間、職業などは次の「表 7」の通りである。

表 7. 韓国人 L2 日本語学習者グループ

No	A	B	C	D	E	F
1	女	39	大学講師	ソウル方言	10 年 2 ヶ月	6 ヶ月未満/日本語学校
2	女	34	大学講師	ソウル方言	8 年	4 年以上/大学
3	女	33	大学院生	ソウル方言	6 年 9 ヶ月	3 年/日本語学校
4	女	21	大学交換留学生	ソウル方言	1 年 2 ヶ月	6 ヶ月未満/日本語学校
5	女	32	大学講師	ソウル方言	3 ヶ月半	10 年以上/大学
6	男	32	大学院生	全羅道方言	2 年 9 ヶ月	4 年以上/大学
7	男	44	大学講師	ソウル方言	3 年 6 ヶ月	6 ヶ月未満/日本語学校
8	男	24	大学交換留学生	ソウル方言	3 ヶ月	6 年/独学
9	男	23	大学交換留学生	ソウル方言	3 ヶ月	3 年以上/高校
10	男	30	大学院生	ソウル方言	4 ヶ月	6 ヶ月/日本語学校

(A:性別 B:年齢 C:職業 D:第 1 言語 E:来日期間 F:韓国での学習期間及び主な学習機関)

被験者の選定において Kim(1999, 2001)では韓国人 L2 学習者とその比較集団として日本語母語話者が設定されている。実験データの構成上どうしても非母語話者の発話データだけが圧倒的に多く繰り返されてしまうため、評価者の判定値も母語話者と非母語話者の発話を区分するような一定のパターン化した結果が現れていた。実際先行研究の評価者からは「似たような訛りが繰り返し流れていて弁別力が落ちる」との指摘があった。そのため今回の実験では韓国人被験者グループとは別に母語話者グループと非母語話者グループに分け、韓国語以外の外国語の話者からなるグループを設けている。「表 8」と「表 9」は比較集団としての L2 の母語話者及び非母語話者グループのバックグラウンドである。

表 8. L2 の母語話者グループ

No	性別	年齢	出身地	日常の使用言語	第 1 言語	第 2 言語	職業
1	男	36 才	富山	共通語	日本語	無	会社員
2	女	29 才	東京	共通語	日本語	韓国語	大学院生
3	男	23 才	広島	共通語	日本語	無	大学生
4	女	19 才	茨城	共通語	日本語	無	大学生

5	女	19才	千葉	共通語	日本語	無	大学生
---	---	-----	----	-----	-----	---	-----

表9. 諸外国語を母語とする L2 日本語学習者グループ

No	性別	年齢	出身国	第1言語	第2言語	来日年数	職業
1	女	24才	中国	中国語	日本語	3年9ヶ月	大学4年生
2	女	32才	中国	中国語	日本語	6年半	大学講師
3	男	38才	フランス	フランス語	日本語	5年	大学講師
4	男	33才	ドイツ	ドイツ語	英語	4年半	大学講師
5	女	38才	アメリカ	英語	日本語	12年	大学講師

3-2-3. 評価者の選定

Kim(1999, 2001)の先行研究では日本語の共通語話者による訛りの判定を行っていたが、今回の実験では共通語を含む日本全国の様々な地方方言出身者による判定を試みた。評価者の出身方言が外国人訛りの評価値に影響を与えるかどうかを調べるとともに、より一般的な意味での日本語の母語話者による外国人訛りの判定結果が得られるということで意義があると思われる。評価者は全部 30 人で、男女の割合はそれぞれ 14 名、16 名となっている。年齢は 10 代後半から 20 代が中心でいずれも現在大学に通っている。詳細は次の「表 10」の通りである。

表 10. 評価者グループ

No	性別	年齢	出身地又は方言	No	性別	年齢	出身地又は方言
1	男	19才	関西弁	16	男	18才	島根県
2	男	19才	石川	17	女	18才	宮崎弁
3	女	21才	出雲弁	18	男	18才	兵庫県
4	女	21才	島根松江	19	男	18才	広島
5	男	19才	鳥取県	20	男	18才	山口
6	男	19才	鳥取県米子	21	男	18才	和歌山
7	女	21才	鳥取県米子	22	女	19才	沖縄
8	女	18才	島根県	23	女	18才	熊本弁
9	女	18才	島根県	24	女	18才	出雲弁
10	女	18才	長崎県	25	女	19才	安来
11	女	19才	さぬき弁(香川)	26	女	18才	名古屋弁
12	女	18才	長崎	27	男	18才	島根県
13	男	19才	共通語	28	男	18才	出雲弁
14	男	18才	福岡	29	女	31才	島根県
15	男	18才	共通語	30	女	21才	出雲弁

3-3. 実験方法

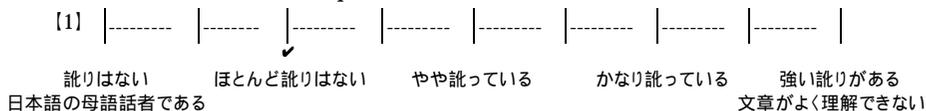
今回の実験データの録音は 2004 年 6 月～2005 年 5 月の間に行われた。録音には IC レコーダ(Olympus, Voice-Trek DS-10)が使用され、騒音のない場所で調査者と被験者の 1

対1の対応で実施された。被験者には録音の前に実験についての事前知識を与えず、実験の方法を簡単に説明した後実験文のスク립トを与えた。各被験者には50文章を2回ずつ朗読してもらった。20~30分間の録音が終わると被験者グループ毎に予め用意された質問用紙を用いて今回の実験に必要なL2学習背景等に関する個人情報を得た。

被験者20人(韓国人話者10人、日本語話者5人、その他の外国語話者5人)の録音データはICレコーダ専用の音声ソフトを用いて各文の間に5秒前後のポーズを挿入するなどの編集作業を行った。被験者の朗読データは、明らかな言い間違いがない限り2回の朗読文中最初のデータを用いた。被験者20人からなる全1000文の録音データから、韓国人話者のデータ500文(10人×50文)とその他の母語話者のデータ250文(うち母語話者と非母語話者の比率は3:2となっている)を集めて、実験文の順番に沿って同じ被験者の朗読文が1文以上続かないように3つの被験者グループの出現頻度を一定に保ちながら50文を1セットに、全15セットのデータを編集作成した。評価者は3つのグループに分けられ、10人の1グループが同一の250文(3セット)の録音データを聞いてそれぞれ評価を行った。

訛りの評価は評価者1~5人が集まって30分間の録音テープを聞きながら事前に用意された評価シート(「表11」を参照)の該当する所にチェックを入れる形で、やむを得ない場合を除いて途中休むことなく250文に対する訛りの判断を行ってもらった。評価シートを用いた判定が終わった後は評価者各自の訛りの判定基準と外国人訛りだと思われた文章についての印象及び特徴を口頭で語ってもらった。

表11. 9-point-scale 評価シートの例



4. 実験結果と分析

4-1. 評価者間信頼度

評価者30人には訛りの判定実験前の予備テストの段階で共通として5つの文章の訛りの判定を行っている。この判定結果を持って評価者間信頼度を図ってみた。その結果は次の「表12」のようで、評価者間の訛りの判定値には有意差は現れず、ある程度の判断の一致が見られると解釈できる。

表12. 評価者間信頼性

実験例文朗読話者	評価者	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差	変動係数
ドイツ語話者(男)	30	5.53	1.16	0.21	0.211
韓国語話者(女)	30	4.03	1.35	0.24	0.335
フランス語話者(男)	30	5.23	1.50	0.27	0.287

中国語話者(女)	30	3.5	1.25	0.22	0.358
日本語母語話者	30	1.33	0.60	0.11	0.455

4 - 2 . 韓国人被験者間外国人訛りの程度の比較

韓国人被験者 10 人の総 500 文の朗読データに対して 30 人の評価者から得た訛りの判定値をまとめ、文章ごとの平均値を求めた。さらに 10 人の被験者間の平均を標準偏差及び変動係数を用いて調べた上で、有意検定を行った。同じ実験文に対して 10 人の被験者の間では平均より著しく訛りの判定値が低かったり(訛ってない)、高かったり(かなり訛っている)する例はしばしば見られたが、統計上の有意差は認められなかった(50 もの文章に対して 10 人の被験者間相関関係を比較しているが、ここでの統計データの表示は省くことにする)。つまり、各文章に対して韓国人被験者の間では訛りの程度の違いは証明されなかった。

次に 50 文に対する被験者の平均を比較することで文毎の有意差を調べてみたが、変数が 50 ともなると統計上の結果があまり意味を持たないことがこの実験で新たに分かった。つまり、統計処理で得られた有意差の判定結果では意味のある解釈を得ることが大変困難である。そこで被験者の訛りの平均と変動係数との比較から 50 文中のいくつかは韓国語話者にとって訛りが感じられ易い要因を持つもの、または訛りが感じられ難い要素を持つものにと分類することにした(次表 13)。その結果、相対的に訛りが感じられ易い文の例は実験文 4、17、39 番で、訛りが感じられ難い文は 1、25、44 番であった。

表 13 . 実験の結果

文章	N	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差	変動係数
30	1	4.201	0.976	0.309	0.232
44	2	4.279	0.872	0.276	0.204
28	3	4.330	1.425	0.451	0.329
32	4	4.476	0.988	0.312	0.221
24	5	4.560	1.031	0.326	0.226
1	6	4.572	0.686	0.217	0.15
35	7	4.583	1.691	0.535	0.369
47	8	4.680	0.958	0.303	0.205
25	9	4.687	0.742	0.235	0.158
3	10	4.690	1.001	0.317	0.213
途中データ省略					
14	41	5.436	1.122	0.355	0.206
22	42	5.461	1.046	0.331	0.192
45	43	5.534	0.787	0.249	0.142
50	44	5.561	1.980	0.626	0.356
36	45	5.620	1.151	0.364	0.205
43	46	5.643	0.748	0.236	0.132
39	47	5.709	0.873	0.276	0.153
49	48	5.762	1.346	0.426	0.234

17	49	5.771	1.102	0.349	0.191
4	50	6.049	0.959	0.303	0.159

*上表は「平均値」の順、次表は「変動係数」の順で文章の番号を並べている。

文章	N	変動係数	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
43	1	0.132	5.64	0.748	0.236
16	2	0.133	5.380	0.716	0.227
45	3	0.142	5.534	0.787	0.249
12	4	0.143	4.898	0.699	0.221
1	5	0.15	4.572	0.686	0.217
39	6	0.153	5.709	0.873	0.276
10	7	0.154	4.847	0.745	0.236
25	8	0.158	4.687	0.742	0.235
4	9	0.159	6.049	0.959	0.303
6	10	0.159	4.848	0.770	0.244
37	11	0.17	5.141	0.875	0.277
26	12	0.176	4.849	0.853	0.270
8	13	0.18	5.172	0.931	0.294
15	14	0.18	5.334	0.961	0.304
46	15	0.19	5.180	0.984	0.311
17	16	0.191	5.771	1.102	0.349
22	17	0.192	5.461	1.046	0.331
20	18	0.199	5.033	1.000	0.316
7	19	0.201	5.177	1.043	0.330
44	20	0.204	4.279	0.872	0.276

*以下データ省略

4-3. 外国人訛りの特質

韓国語と日本語の音韻面での対照比較分析によって韓国語話者にとって難しいとされる日本語の発音は、清音と濁音の区別、撥音、促音、語頭の/r/音、「つ」音、長・短音の区別があげられる(Hong 1995)。また超分節的要素である日本語の共通語のような高低アクセントは一部の地方方言では存在が認められているが、韓国の共通語の基盤となっているソウル方言は無アクセント方言である。それに比べて日本語は単語をピッチアクセントで区別する言語変種である。日本語においても音韻的な方言差は重要であるが、それは母音や子音というよりは、アクセントのような超分節的要素の役割が大きいとも言える。従って、高低アクセントによって意味が区別される日本語のアクセントパターンは韓国人L2学習者にとっては「認知」そのものもきわめて困難なことである(cf. ロング 1997、佐久間 1973、Min 1989)。

今回の実験で評価者が日本語話者の地方方言とは異なる訛りとして判断した外国人訛り

の特徴をまとめたものが次の「表 14」である。

表 14 . 外国人訛りの特質

- ・ 理解はできるが濁音がおかしいと思った。
- ・ 発音や息遣いに独特な特性があってそれが外国人訛りだと思った。
- ・ 文の最初は訛ってなかったが、最後の部分は訛っていておかしかった。
- ・ 語尾が聞き取り難い人や声が低い人は外国人だと思った。
- ・ スピードと発音が訛りの決め手。(読むスピードが)速いと訛りが目立たない。
- ・ カタカナの発音に引っかかった。例えば、スイッチ、エンジン、ドライバーなど。
- ・ (同じ外国人の発話でも)女性のほうが聞き取りやすかった。
- ・ 発音やリズムが若干異なる。
- ・ 今まで英語圏の人や韓国の人と話したことがあるので、韓国人の日本語のしゃべりの傾向とかが感じられた。
- ・ 発音の違い(例えば、口の開け方など)で、文章自体は訛ってなくても訛ってるように思えた。
- ・ 「課長」が「かちょ」に、「買って」が「かて」に聞こえた。
- ・ 感情が入っていると、ずっと、ぱっと言えるのが日本人だと思った。逆にたどたどしいと訛っていると判断した。
- ・ 「だ・ぢ・づ・で・ど」が言えてない。全体的にあせってる。声が暗い。
- ・ もわーっとした感じ。ふわーっとした感じのしゃべり方。
- ・ イントネーションで日本人か外国人かが分かる。「プレゼント」のような外来語が英語っぽい。
- ・ 速くしゃべるとすぐ分かる。逆に極端に遅くても訛りは感じやすい。

5. まとめ

本研究は Kim(1999, 2001)で実施された一連の実験結果を再考察する目的で、先行研究に使われた例文を検証対象にした。今回の実験では L2 学習年数(在日年数)がそれぞれ異なる韓国人話者 10 人を対象に 50 の実験文を用いて外国人訛りの程度を調べた。30 人の日本人話者による訛りの判定結果から次のような結論が得られた。無経験の評価者による日本語の母語話者と非母語話者を対象にした訛りの程度判定において評価者間の判断結果に有意差は見られなかった。50 の実験文に対する韓国人被験者の外国人訛りの平均値は被験者間で有意差が見られなかった。日本語話者の外国人訛りに対する評価基準には単音の発音のような分節的特質の違いによるものと、発話のスピード、声の質、リズム、アクセントのような超分節的特質の違いによるものが両方かかわっていた。

「3 - 1」の実験の背景で述べていた 50 の実験文の中で韓国人 L2 日本語話者にとってより訛りが感じられ易いものと訛りがあまり目立たないものの分類が統計上の有意差判定では明らかにされなかった。その原因の 1 つとして変数の数が多すぎたことが考えられる。ま

た被験者の外国人訛りの特質を把握するにあたって評価者の評価基準と実際の訛りの判定結果の間には必ずしも一致しない要素も含まれていて、その分析が用意ではないことが言える。一例として外国人訛りの特質として評価者の多くが取り上げていた外来語の発音(カメラやタクシーなど)の場合、これらの単語が入った文章が他の文章に比べて外国人訛りを感じやすくする要因であると言えるような根拠が十分ではないことが分かった。実際、訛りが感じ難い文の例には文 25 の外来語「カメラ」と、文 1 の韓国人が苦手とする「かぜ」のような濁音の発音が入っている。

今回の実験で取り上げた文章の具体的にどの部分の特徴が訛りの認知につながったかなどについては更なる検討が必要なもので、今後の研究課題として追究していきたいと思う。

参考文献

- Flege, J. (1980) Phonetic approximation in second language acquisition. *LL* 30, 117-135.
- Flege, J. (1984) The detection of French accent by American listeners. *JASA* 76, 692-707.
- Flege, J. (1987a) A critical period for learning to pronounce foreign languages? *Applied Linguistics* 8, 162-177.
- Flege, J. (1988) Factors affecting degree of perceived foreign accent in English sentences. *JASA* 84, 70-79.
- Flege, J. & Fletcher, K. (1992) Talker and listener effects on degree of perceived foreign accent in English sentences. *JASA* 91, 370-389.
- Flege, J., Munro, M., & Mackay, I. (1995a) The effect of age of second language learning on the production of English consonants. *Speech Communication* 16, 1-26.
- Flege, J., Munro, M., & Mackay, I. (1995b) Factors affecting strength of perceived foreign accent in a second language. *JASA* 97, 3125-3134.
- Flege, Takagi, & Mann. (1995) Lexical familiarity and English language experience affect Japanese adults' perception of /r/ and /l/. *JASA* 97, 1161-1173.
- 福井玲(2000) 『韓国語のアクセント』日本音声学会全国大会予稿集 p.7-12
- Gass & Varonis (1984) The effect of familiarity on the comprehensibility of nonnative speech. *Language Learning* 34, 65-89.
- Hong, Saman(1995) 『韓・日語対照語学/論考』塔出版社(韓国)
- Kim Kukhee(1999)「外国人訛り(Foreign-Accentedness)」東京大学大学院修士学位論文
- Kim Kukhee(2001)「L1 方言別 L2 音声習得の差異」東京大学外国語教育学研究論集(第5号)
- Krashen, S. (1973) Two studies in adult second language learning. Paper presented at the meeting of the *Linguistic Society of America*, San Diego.

- Lenneberg, E. (1967) *Biological foundations of language*. New York:Wiley,
- ロング・ダニエル(1997) 方言からみた日本語らしさ 「日本語学」7月号 6-13
- Min, Kwangjun(1989)「韓国語話者の日本語音声における音律的特徴とその日本語話者による評価」『日本語教育』68、日本語教育学会
- Munro, J.(1995) Nonsegmental Factors in Foreign Accent. *SSLA* 17, 17-34.
- Munro, J.(1998) The effects of noise on the intelligibility of foreign-accented speech. *SSLA* 20, 139-154.
- Munro, M., & Derwing, T. (1995a) Foreign accent, comprehensibility, and intelligibility in non-native speech. *Language Learning* 45, 73-97.
- Munro, M., & Derwing, T. (1995b) Processing time, accent, and comprehensibility in the perception of foreign-accented speech. *Language and Speech* 38, 289-306.
- Munro, M., & Derwing, T. (1997) Accent, Intelligibility, and Comprehensibility: Evidence from four L1s. *SSLA* 19, 1-16.
- 佐久間県(1973)「標準日本語の発音・アクセント」厚生閣
- Scovel, T.(1969) Foreign accents, language acquisition, and cerebral dominance. *Language Learning* 19, 245-253.
- Scovel, T. (1988) *A time to speak: A psycholinguistic inquiry into the Critical Period for human speech*. New York: Newbury house.
- Schmid, B. (1986) A Comparative Study of Children's and Adults' Acquisition of Tone Accents in Swedish. *Language Learning* 36, 185-209.
- Selinker, L. (1972) Interlanguage. *IRAL* 10, 209-231.
- Suter, R. (1976) Predictors of pronunciation accuracy in a second language learning. *Language Learning* 26, 233-253.
- Thompson, I. (1991) Foreign accents revisited: The English pronunciation of Russian immigrants. *Language Learning* 41, 177-204.